

2019. 4. 21. 復活祭主日礼拝式説教

聖書：ヨハネによる福音書20章1-9節

『死者の中から復活した主』

おそらく多くの方が経験しておられることだと思うのですが、例えば、映画を観たとき、一回目に見たときには気づかなかったことが、同じ映画を二回目観たときに気づくということがあります。一回目は、普通かな、ちょっとおもしろいぐらいかな、と思ったただけだったのに、二回目見たときには、その映画の面白さに気づくという感じですが。その映画が惹かれて、さらに回数を重ねていき、三回、四回、とみていくと、もっと別のことに気づく、という場合もあります。それは映画の中の風景や、畑の稲穂が風に揺れているシーンや、何気ない会話にとっても引きつけられるという具合にです。そもそもなぜこの映画にこんなに惹かれるんだろう、と思いながら見ている。映像そのものが自分に迫ってくる感じで、見ているというより、向うからの呼びかけのようなものを感じるということです。

見るという行為はとても不思議なもので、何回も見ているうちに同じものを見ているにもかかわらず、見方が変わるということはよくあることです。昔父や母がしていたこと、何気ない日常のしぐさや行動が、年齢を重ねていく中で、見え方が変わってくるということもあります。見るには目で対象を捕らえるという意味だけでなく、判断するとか、考えるという意味も日本語にはあります。意見とか、見解とか、見識とか、さらに発見という意味もあります。つまりわたしたちは何かを見ながら自分の見方、判断、考えをつくったり、壊したり、見出したり、新たに造られたりしているのです。

復活祭の朝を迎えました。ある人は人類にとっても最も幸せな朝、と復活祭の朝のことを呼びました。この朝わたしたちに聖書日課で示された聖書箇所はヨハネ福音書20章の1節から9節です。これがヨハネの記す最初の復活祭の朝の出来事です。ただこの聖書を読んだ最初の印象はキョトンとさせられるような、なんのこと、というような印象かもしれません。

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして墓から石が取りのけてあるのを見た。」安息日が終わり、最初に墓に向かったのは、12弟子たちではなく、マグダラのマリアでした。彼女はキリストの女性の弟子のひとりで、主イエスの伝道にも一緒に従事したであろうと言われる女性で、ヨハネ福音書

によれば、十字架のそばに立ち尽くしていた人の一人です。彼女は墓に着き、墓から石が取りのけてあるのを見る、のです。彼女はその光景を見て、急いでペトロのところと、イエスが愛しておられた弟子のところに走ります。イエスが愛しておられた弟子とは、謎めいた書き方ですが、ヨハネ福音書にだけ出てくる表現です。マリアは墓の石が取りのけてあることから、主イエスの遺体が誰かによって取り去られた、とこのとき思ったのです。マリアはそのように見るのです。

マリアからそのことを聞いた二人は、走って墓に向かいます。

二人はおそらく小走りに走ったというのではなく、全力で走った。ペトロではないもう一人の弟子が先に墓に着き、そこで「身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった」と訳されていますが、原文にはかがみこんで、墓の中に亜麻布が置いてあるのを見る、とあって、見るという言葉が書かれている。もう一人の弟子は亜麻布を見るのです。

おそらくペトロが来るのを待って、ペトロに気を使って、先にペトロを墓に入らせたのでしょう。ペトロは墓に入り、ペトロもまた、亜麻布が置いてあるのを見るのです。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じところには置いてなく、離れたところに置いてあった。

そして先に墓についていたもう一人の弟子が、後から墓に入ります。彼は、見て、信じた、というのです。つまり今朝読んだ聖書箇所には、わずか8節の間に「見た」という言葉が4回出てきます。最初にマグダラのマリアが墓から石がどけてあるのを見る、次に、イエスが愛しておられた弟子が、墓の中の亜麻布を見る。さらにペトロが墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見る。そして最後にもう一人の弟子も入って、見て、信じた、と4度出てくる。元の言葉では、「見る」の最初の二つが同じ言葉、三つ目と四つ目がそれぞれ違う言葉使われているのです。4回ある見るに、3種類の見るという言葉が使われている。

明らかにヨハネ福音書の著者は見るということに注意を払っています。「見る」ということの違いを表現している、と言っていい。どんな風に使い分けているか、というのはとても難しいことですが、あえて言えば、最初の二つの見る(ブラポー)、これは目で対象を捕らえるという時の見るです。墓の石が取りのけてあるのを見る、亜麻布が置いてあるのを見る。公園にベンチがあるのを見る、という見るです。三つ目のペトロが墓に入って見る、テオレオー。これは時間をかけて、じっくり観察するというような見る。ペトロは墓の中に入って、何があるのか、何がないのか、注意深く見るのです。四つ目の見るはホラオー、これは心の目で真理を洞察する、という意味がありま

す。ヨハネ福音書の16章に主イエスのこういう言葉があります。「しばらくすると、あなた方はわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」これは主イエスが十字架にかかる直前に言われた言葉ですが、わたしを見ることができなくなるが、やがて見るようになる、テオレオーできなくなるが、ホラオーできるようになる。見えなくなる、というのは、ただ地上から主イエスがいなくなって見えなくなる、というだけではなく、わたしたちにとって主イエスとは誰だったのかということがわからなくなる、見えなくなるということです。だがしばらくすると、主イエスほどのような方なのか、見るようになる、と言われたのです。十字架で死んだ主イエス、残酷な刑で無残な死に方をした主イエスが、神によって甦らされて、わたしたちの救い主なのだ、ということが見えるようになる、そう主ご自身が語られたのです。

イエスが愛しておられた弟子は、墓の中に入ってきて、見て、信じた。この見てには目的語がない。墓の石が取りのけてあるのを見て、とか、亜麻布が置いてあるのを見て、というのとは違い、何を見たのか、なにも書いていません。何をこの弟子は見ただのか。この弟子は、12弟子たちが十字架の直前におそろしくなって逃げだしたその時も、主イエスから離れることなく、十字架の傍らにあり続けた弟子でした。この弟子が誰なのか、諸説あって特定はできないのですが、いずれにせよ、主イエスから離れようとしなかった弟子で、十字架を見つづけたひとりでした。十字架を見つづけた、つまり残酷で、無残な死を見届けた人です。だが十字架にこの人は何を見ていたのか。あの十字架の周りで、ほとんどの人が、残酷で無残な死を見ていた。先週のルカ福音書で聞いたように、嘲るものや侮辱の音が聞こえる中、力尽き、変わり果てていく主イエスの姿を十字架の周りにいた全員が見ていた。その目で対象を捕らえ、死にゆく姿を見た。だが、その死に行く姿の中に、何かを発見するように見た人もいた。

あの時同じように十字架につけられた犯罪人の一人は、「我々は自分のやったことの報いを受けているのだから当然だ、しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そう見る人がいた。彼は、自分を殺そうとする人のために神に赦しを請う主イエスの祈りを聞き、この方は自分の悪のためではなく、人のために十字架に磔になっている、ということを見ている。それは、ホラオーという見るだ。イエスという方はご自分が十字架から降りないことで、自分で自分を救うことのできない人間の場所に立ち尽くしておられるのだ、ということを見ている。

イエスの愛した弟子、この人は十字架の一部始終を見ていた人です。その場から立ち去らず、見ていた人です。そこで何を見たのか。他の人々と同じく、確かに死に行く姿を見ました。だがその姿から受け取っているものは、つまり見ているものは、他の人々とは、違うものだったのではないか。その死そのものに、まだよくわからないにせよ、イエス・キリストの十字架への強い意志、どうしても果たさなければ、という意志を見ていた。謙り、愛、を見ていたのではないか。

入ってきて、見て、信じた。見たのは、空の墓です。何もない墓。そこに、神の恵みの力と働きを見た、この墓を空の墓にされたのは、まぎれもなく神ご自身だ、ということを見たのです。見ること即、信じることだったのです。9節にあるように、ペトロとこのもう一人の弟子は、復活ということを十分理解していたわけではない。しかし、この弟子は、十字架の主イエスを見ることと、空の墓を見ること、そこにキリストの意志と神の意志が強く働いていること、それを見たのです。無残に死んだ十字架のキリストに、わたしを愛する愛を見たように、空の墓を見て、キリストを死んだままにしておかれない、神の生きた働きを弟子は見た。見ることから信じることへと導かれた。わたしたちもこのような信仰へと神によって導かれていきたいと思います。

D a t a : 復活祭主日礼拝説教
讃美 : 前331、後326
新生教会礼拝堂